

平成5年度から10年度のスキー実習報告

塚田修三*・内山了治**・児玉英樹***

An Examination of the skiing school from 1993 to 1998

Syuzo TSUKADA, Ryoji UCHIYAMA, Hideki KODAMA

Since 1963, Nagano National college of Technology has been offering a skiing school as one of academic events. The purpose of the skiing school is not only to learn skiing skills, but also to develop the friendship among the participants. In addition, this event takes advantage of characteristics of our home nature. This report summarizes: 1. the outline of the skiing school carried out between the academic year of 1993 and that of 1998, and 2. the result of the questionnaires after the skiing schools. We found that students were very enthusiastic, and their skills were improved. The events were fully supported by our faculty members, and valued highly by the participants. From the points mentioned above, we believe that our goals of the events had been achieved; however, we must continue our effort to improve the quality of the event further.

キーワード：冬季スポーツ，スキー実習，アンケート調査

1. はじめに

本校のスキー実習は、昭和38年度本校発足以来続いている学校行事の一つである。実習の目的はスキー技術の習得、団体生活おける規律面の向上、及び教官と学生相互の親睦を図ることにあり、雪深い北信濃の自然を生かした行事でもある。

学年行事的な色彩を含めた現在の形態は、平成5年度から行われている。これは平成4年度の反省で、これまでの1学年5クラスを2クラスと3クラスの2グループに分け、6日間を費やしていた方法について、授業への影響、週5日制の中で実習が休日に及ぶこと等の理由から、1学年5クラスを1回にまとめて効率的に実施すべきであるとの方向が出されたことによる。実施にあたり、5クラスを収容できる宿泊施設、スキー場の環境、立地条件や実習時間の確保、指導員の確保、及び学生の負担等の観点から候補地をあげ検討した結果、場所はこれまで通り黒姫高原スキー場とし、宿泊施設は民間ホテルを利用して、1学年全クラスが2泊3日の同一期間で実施されるようになった。

本報告は、この方法によって実施した平成5年度から平成10年度までの5回(平成9年度は中止)のスキー実習についての概要と、実習終了後の学生に対するアンケート調査をもとにまとめたものである。

*一般科教授
**一般科助教授
***一般科講師

原稿受付 1999年10月28日

2. スキー実習の流れ

昭和38年度から平成10年度までのスキー実習を振り返ると概要¹⁾は次の通りである。平成9年度は、「第18回オリンピック冬季競技大会 長野1998」による授業・行事予定の変更のため実習を中止した。

(1) 実施学年

昭和38年度～昭和52年度 1, 2学年

昭和53年度～平成10年度 1学年

(2) 実施日数

昭和38～昭和44年度 各クラス 1日

昭和43年度 2泊3日

昭和45年度～昭和60年度 各クラス 1泊2日

昭和61年度～平成4年度 2グループ各2泊3日

(3) 実施延日数

昭和38, 39年度 3日

昭和40, 41年度 6日

昭和42年度 7日

昭和43年度 5日

昭和44年度 8日

昭和45年度～昭和52年度 10日

昭和53年度～昭和60年度 5日

昭和61年度～平成4年度 6日

平成5年度～平成10年度 3日

(4) スキー場

昭和38年度 池ノ平スキー場

昭和39, 40年度 柏原スキー場

塚田修三・内山了治・児玉英樹

昭和41年度～平成10年度 黒姫高原スキー場

(5) 宿泊施設

昭和45年度～平成4年度 黒姫山荘

昭和62年度～平成4年度 黒姫山荘, 明星大学山荘

平成5年度～平成10年度 黒姫高原 ホテル「若月」

3. 実施状況について

(1) 実施状況の概要

実施状況の概要は表1のとおりである。平成10年度は当日欠席者が多かったが、どの年度も参加学生の実習に取り組む姿勢は熱心であり、黒姫スキー学校の指導員からも高く評価された。

表1 実施概要

年度	H5	H6	H7	H8	H10	
開始日	2/1	1/23	1/24	1/29	1/20	
終了日・曜	3(木)	25(水)	26(金)	31(金)	22(金)	
参加予定	202	206	207	201	207	
当日欠席	5	8	1	2	11	
実参加者	197	198	206	199	196	
引率者数	9	8	8	9	8	
実習班数	16	16	16	16	18	
指導員数*	16	16	16	16	16	
天候	1日目	雪	雨・雪	晴・雪	小雪	晴・曇
	2日目	雪	雪・風	晴	晴	雪
	3日目	雪	雪・風	雪	晴	晴
リフト	100組	107組	116組	137組	139組	
リフト		16	17	47	55	
負傷者	1	2	1	0	2	
	不調	8	12	6	1	2

* スキー学校指導員数

(2) 引率者(敬称略)

平成5年度：(学年)成澤紀夫, 新保良明, 戸谷精三, 山口博己, 久保田廣志 (体育)里見 弘, 加藤俊也
塚田修三 (教務)山田進之

平成6年度：(学年)塚田修三, 小澤志朗, 中村博雄, 寺井直樹, 藤原勝幸 (体育)加藤俊也, 内山了治
(教務)山田進之

平成7年度：(学年)宮坂忠昭, 曾田友紀子, 内山了治
宮崎 誓, 中村護光 (体育)加藤俊也, 塚田修三
(教務)山田進之

平成8年度：(学年)倉島史憲, 前田善文, 戸谷精三
藤沢太郎, 宮崎晃臣 (体育)加藤俊也, 塚田修三
内山了治 (教務)小林義昭

平成10年度：(学年)塚田修三, 小澤志朗, 中村博雄,
久保田和男 (体育)内山了治, 児玉英樹
(教務)藤田光雄

(3) 年度毎の主な変更点

平成5年度

- ①1学年5クラスを1回(2泊3日)にまとめて実施した。
- ②宿舍がグレンデに近いため、これまでグレンデと宿舍の往復に要した時間と労力が短縮・軽減できた。

平成6年度

- ①菜を充実させた。
- ②学年行事としての意味合いも持たせ、修学旅行の事前訓練として、集団行動やホテルでのマナーの指導に配慮した。
- ③ウェアもレンタルできるようにした。スキーセットと同様にホテルにお願いした。

平成7年度

- ①実習終了後に休日がほしいとの学生の要望から、水曜日から金曜日を実習期間に設定した。
- ②自由滑走時間を、2日目の実習終了後に設定した。
- ③1日目の昼食を前山食堂で摂れるようにした。平成5年度までは無料休息所を利用したが、この施設は平成6年度に取り壊されたため、雨の中、外で寮弁当を食べなければならない学生もあった。本年度からこれらが解消された。

平成8年度

- ①実習の様子をVTRにまとめた。

平成10年度

- ①実習グループを自己申告制で事前に決定した。技術の確認のために平成8年度の実習VTRを全員に視聴させ、グルーピングの参考にさせた。前回までは、開校式終了後に仮グループごとに滑走し指導員が判別していた。等質グループができる反面、講習時間が減少してしまうデメリットがあった。
- ②リフト券を3日間券とし、全員に配付した。
- ③1班あたりの受講人数を少なくするため、体育教官2名が実習班を担当した。

(4) 経費について

スキー実習に要する主な経費は、宿泊費、バス代、指導員費、リフト券代、スキー・ウェアのレンタル料等である。これらの経費は、学校(国費、後援会費)、学生(旅行積立金、個人)の負担によってまかなわれている。

黒姫山荘, 明星大学山荘を利用した平成4年度までの実習においては、宿泊代とバス代を国費・後援会費で負担し、指導員費は国費と一部を学生負担(旅行積立金)とした。また、スキー用具は学校備品を使用した。国費、後援会費で負担する項目は、平成10年度まで同じである。

平成5年度は、民間のホテルを利用したため増額となった宿泊費の一部を学生負担とし、旅行積立金をあて

平成5年度から10年度のスキー自習報告

た。指導員費は、指導員1名減により学生一人あたりの負担は軽減した。その他、スキー用具は、学校備品の台数不足からレンタルスキーを利用することとし、レンタル料は利用者学生負担とした。

平成10年度の経費では、宿泊費、リフト券代の値上がりにもなう若干の負担増と傷害保険料、1日目の昼食代が学生負担として加わった。

(5) 平成10年度の日程

平成10年度の日程は次のとおりである。講習は6回あり、集中した実習により技能の向上が見受けられた。

《1日目：1月20日(水)》

8:20 学校集合出発	16:30~17:30 片付・入浴
10:00 宿舎着・準備	17:30~18:00 夕食
10:45 スキー場集合	18:00~20:30 入浴・学習
10:45~11:00 開講式	20:30~21:00 meeting
11:00~13:00 実習	21:00~22:30 学習
13:00~14:00 昼食	22:30 消灯・就寝
14:00~16:00 実習	
16:30 宿舎集合	

《2日目：1月21日(木)》

6:30 起床	13:30~15:30 実習
7:00~7:30 朝食	15:30~16:00 自由滑走
7:30~8:30 準備	以下1日目と同じ
8:30 宿舎発	
9:30~11:30 実習	
11:30~13:30 昼食	

《3日目：1月22日(金)》

8:30まで2日目に同じ	14:30 宿舎集合
9:00~11:00 実習	15:15 宿舎発
11:00~12:00 昼食	16:30 学校着 解散
12:00~14:00 実習	

4. アンケート結果について

課題や反省点を次年度に生かせるよう、平成7年度から実習終了後にアンケート調査を実施した。ここではその一部について報告する。

(1) 実習への参加姿勢及び意義について(表2, 図1)

実習への参加姿勢は例年80%以上の学生が意欲を持って取り組んでおり、否定的な学生は各年10名以下であった。しかし、「どちらともいえない：学校のプログラムとして取り組まれているので仕方なく参加する」

表2 実習への参加姿勢

参加姿勢	H7	H8	H10
大変意欲的	83 41.7%	56 29.2%	56 29.2%
意欲的	89 44.8%	98 51.1%	98 51.1%
どちらともいえない	17 8.5%	30 15.6%	30 15.6%
あまり意欲がなかった	4 2.0%	7 3.6%	7 3.6%
やる気がなかった	6 3.0%	1 0.5%	1 0.5%
総計	199	192	192

図1 実習の意義
 □1:大いにあった □2:あった
 ■3:どちらとも言えない □4:あまりなかった
 ■5:なかった

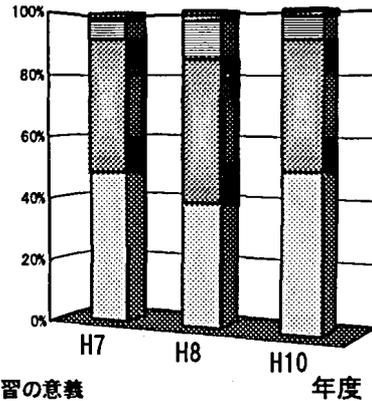


図1 実習の意義

実習の意義	H7	H8	H10
大いにあった	97 48.5%	76 39.6%	97 50.6%
あった	86 43.0%	87 45.2%	77 40.1%
どちらとも言えない	12 6.0%	23 12.0%	14 7.3%
あまりなかった	1 0.5%	3 1.6%	2 1.0%
なかった	4 2.0%	3 1.6%	2 1.0%
総計	200	192	192

いう学生がH8年度から増加しているのも事実である。また、実習の意義に関しては、学生の受け止め方として、H7とH10年度は90%以上、H8は85%の学生が「意義が大いにあった」「意義があった」と回答しており、行事としての所期の目的は達成されているといえる。

(2) 実習時間、技能の向上について(表3, 4, 図2)

実習時間については、「一回の実習時間」か「全体の回数」或いは「総実習時間」についてかを区別しなかったため、明確でない面もあるが、全体の半数弱が現状で良いと回答していた。一方、例年「短かった」「もう少し長くても良い」という学生が「長かった」という学生を上回っていた。実習後に自由滑走の時間を平成7年度から組み込み、これらの学生の要望に応えたが、1回の講習時間を増加させることは講師をスキー学校の指導員に依頼している関係上困難かと思われる。

表3 実習時間

実習時間	H7	H8	H10
良かった	94 47.2%	95 49.5%	86 44.8%
長かった	29 14.6%	34 17.7%	40 20.8%
短かった	67 33.7%	58 30.2%	55 28.6%
その他	9 4.5%	5 2.6%	10 5.2%
総計	199	192	191

表4 技能の向上

技能の向上	H7	H8	H9
大いに向上した	56 28.1%	39 20.3%	52 27.1%
向上した	124 62.3%	123 64.1%	121 63.0%
どちらともいえない	16 8.0%	26 13.5%	14 7.3%
向上しなかった	3 1.5%	3 1.6%	3 1.6%
下手になった	1 0.5%	1 0.5%	2 1.0%
総計	200	192	192

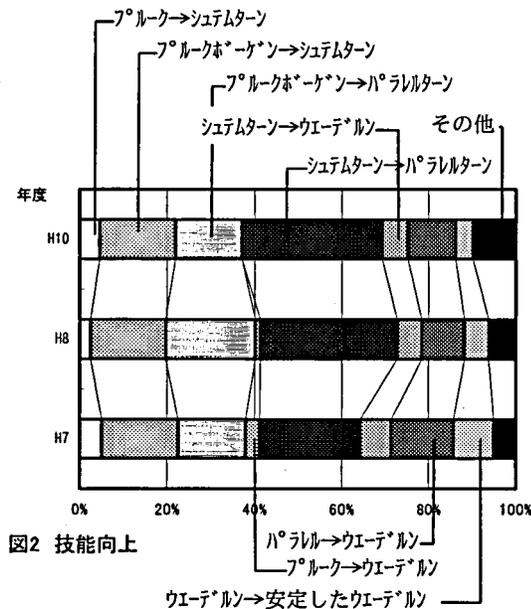


図2 技能向上

技能の向上に関しては、表4に示したとおりであるが、自ら向上したと判断した学生が各年80%以上おり、このことが実習の意義として評価されていると判断できる。この年代に集中的な実技指導は効果的であり、引率者の目からも学生の向上は捉えられた。技術的な進歩はシュテムターンレベルの学生がパラレルターンやウエーデルンに上達した割合が高く、中にはブルーケからウエーデルンにまで進歩したと自己評価している学生もあった。シュテムターンはスキー操作のすべてを含む高度な技術として位置付けられるが、多くの学生が中級者から上級への過程にあると自己評価していた。スキー学校指導員の技術力の高さと、実習や自由滑走時間に意欲的に滑り込む学生の姿勢が、これらの技能の向上に結びついていたといえる。今後は全日本スキー連盟による基礎技能検定等に挑戦させ、より高度な技術レベルを目標とさせることなども検討する余地があると思われる。

(3) 団体行動について(表5,6)

全クラスが同一期間で実施できるようになり、学年行事として位置付け、2年次に控えた修学旅行の予行演習や団体行動の事前訓練の意味合いを持たせ指導することが可能となった。ゲレンデでのスキー実習は体育教官が、宿舎での学習・生活指導はHR担任がそれぞれ中心となり指導にあたり、大きな問題行動もなく経過してきた。しかし、実施時期が入学直後の高遠オリエンテーションとは異なり、1年次後半でしかもスキー場という雰囲気から、開放的になる面も見受けられマナーが悪い行動もあった。平成7年度に、ある部屋に10名ほどの学生が集まり談笑し、噛んでいたチューイングガムを畳や机上に放置し取れなくなってしまう問題

が生じた。ホテル側からの指摘で発覚したが、HR担任が学生の指導と保護者に連絡し、学年全体ではマナーについて考えさせた。一部の学生の不屈きな行動が全体に迷惑を掛けてしまう残念な出来事であった。飲酒や喫煙に発展しなかったことが救いであった。

集団行動に関する学生の回答は表5,6に示したが、集団の一員としての責任は年度毎の差はあるが60%以上が「果たせた」と自己評価していた。反面、集団生活や団体行動における規律面に関しては、「果たせた」と回答している学生は半数であり、「果たせなかった」とする学生が各年度とも15-16%存在した。平成10年度のアンケートでは、果たせなかった具体的な内容として消灯が35%を占め最も多かった。次いで、2日目のゲレンデでの点呼であった。ゲレンデでの点呼は、「もう1本滑走したい」という理由で遅れる者や、点呼がゲレンデで行われることを知らなかったとする学生もあり、自由滑走の位置付けと合わせ課題としてあげられる。その他の集合時間や点呼に関しては6割以上の学生が果たせたと答えており、実際の場面でも特に問題は見受けられなかった。今後は、期末試験が近い時期でもあり学習する雰囲気やホテルでのマナーの向上等の指導が課題といえる。

表5 集団生活の責任

集団生活の責任	H7	H8	H9
果たせた	134 67.3%	140 72.9%	121 63.0%
どちらとも言えない	56 28.1%	46 24.0%	60 31.3%
果たせなかった	10 5.0%	6 3.1%	11 5.7%
総計	200	192	192

表6 集団生活の規律

集団生活の規律	H7	H8	H10
果たせた	90 45.2%	97 50.5%	97 50.5%
どちらとも言えない	80 40.2%	64 33.3%	64 33.3%
果たせなかった	30 15.1%	31 16.1%	31 16.1%
総計	200	192	192

(4) 学生の意見・要望について

ここでは実習に対する学生の意見や要望について、アンケート調査に記述されたものを、学生の生の声として年度毎に掲載した。語尾の数字は同意見を記述した人数である。

①平成7年度 (◎は次年度に改善した項目)

<マナーについて、信頼の回復や改善策について>

- ・ なんかしたこととか詳しく聞いていないのでよくわからないが、ありのままを後世に伝えてみる。改善するには一人ひとりが考えるしかない。先生方がもっと見守る或いはペナルティをつける。
- ・ 「マナーの悪さ」とは何か明確にする。
- ・ 一人ひとりが大人になり、一般常識を身につける。
- ・ マナーというのは一人ひとりが守るべき事。4

- ・個人の自覚しかない。2 ・各自が責任を持つ。9
 - ・そのような人がどうして高専に入れるのか。
 - ・普通生活していても、ゴミのポイ捨てをしている人が結構いる。その人々は、親からそういう教育しか受けていない。放し飼いにされて、利己的な人間になったはず。だから10数年生きてきて、そのような行動が身について当たり前になっている。つまり簡単には改善されない。
 - ・今回のマナーの悪さがどうこうより、普段の生活のマナーから改善して行くべきである。
 - ・マナーの良さのアピールを一からやり直すしかないと思う。後輩たちは苦労すると思う。
 - ・今後の自由行動(修学旅行)の自粛。名前を公表する。
 - ・男子は修学旅行でも部屋は近いのだから代表がその部屋全部の人に伝える。そうすれば「知らなかった」なんて言い訳は許されなくなり完全に個人の責任になる。高専生としては必然的に実行できるはず。行った人が一回だけでなく何回も謝りにいく。何年もかけて地道に回復するしかない。
 - ・来年度の1年生にがんばってもらうよりない。2
 - ・部屋の清掃を3日目の朝だけというところが大多数だったのでは？1日目～3日目で一日一回でも清掃の時間を設け、かつ確認をすればどうでしょうか？
- <その他、全般>
- ・消灯をしっかりやる。室長がしっかりすればいい。
 - ・乗をしっかり読んで点呼には遅れないようにする
 - ・あと一日増やしてほしい。来年も実施したい。2
 - ・指導員の方にもよると思うが自由が多すぎるのも向上にはつながらないので考慮してほしい。
 - ・とても易しく教えていただいたので身に付きました
- ◎昼休みを長くする。自由滑走の時間を増やす。10
- ・ナイターもできる場所がいいと思う。
 - ・スキー実習を自由参加にすればいいと思う。
- ◎皆に2日券などを配ればいいと思う。
- ・宿泊所からグレンデまでの距離がきつい。

②平成8年度 (◎は次年度に改善した項目)

- <講習について：班毎の意見・感想>
- ・1班：先生がとてもうまく大変参考になった。6
 - ・2班：先生が要点を話し滑った。ストック無し、片足等の滑走。上達した。9
 - ・3班：もっといろいろ教えて欲しかった。6 少しのことに集中できたので良かった。2
 - ・4班：基本的なことをしっかり教わり良かった。5
 - ・実習スピードが他の班より遅かった。
 - ・5班：大変良かった。独学では身に付かないことや、知らないことが分かって良かった。こつを教わりよかった。多く滑れて良かった。4 疲れた。あまり細かくなかったのどうやればよいか悩んだ。

- ・6班：講習がしっかりしていて滑走もたっぷりあり良かった。充実していた。9
 - ・7・8班：良かった。9
 - ・9班：丁寧に指導して貰った。4
 - ・10班：基礎から丁寧に指導して頂き良かった。2 フレンドリーな先生で楽しかった。2
 - ・11班：基礎から、パラレルまでに到る者もいた。トレインやシングルが面白かった。8
 - ・12班：ボーゲンからパラレルまで、とても教え方がうまかった。技能が向上した。9
 - ・13班：先生も楽しかったし、思い切り滑れて良かった。6
 - ・14班：先生が良い人だったので楽しかった。レベルに応じた指導だった。2
 - ・15班：わかりやすくて良かった。3
 - ・16班：はじめて滑ったけどパラレルまで出来るようになった。向上できた。3
- <実習全般について>
- ・吹雪がひどかった。悪天候だった。吹雪のなかの講習はきつい。顔が凍る。7
 - ・自由滑走の時間がもう少し欲しい。50
 - ・班分けが曖昧すぎる。レベルにあっていない者がいた。4
 - ・3日目には疲れが蓄積して転びやすくなるし、注意力も低下するので、休憩をしっかり取るべきだ。
- ◎2日目の昼(スパゲティー)はお腹にたまらなかった。
- ◎昼食の量が少ない。14
- ・お昼がおいしくなかった。時間をずらした方が良い。
- ◎貸しスキーの受け取りに時間がかかった。5
- ◎レンタルスキーの調子が悪かった。2
- ・シールを貼っても間違えられた。ワックスの準備。
 - ・スキー場から宿までを滑って行けるようにしてほしい。：2
 - ・スキー場から宿まで滑走する者に追突された。
- <宿舎関係>
- ◎部屋が狭い。1人当たりの畳数が少ない。3
- ・風呂が良かった。
 - ・トイレが混み合うので何とかした方が良い。
 - ・部屋の前のスリッパが無くなるのは何故か。
 - ・宿舎で余暇の時間が多く良かった。
 - ・消灯・就寝時刻が早かった。3
 - ・朝をゆっくりして貰いたい。
 - ・スキー以外でやってはいけないこと、持ってきてはいけない物を明示して欲しい。あとで時間を持って余して後悔することになると思う。
- ◎ゲーム機は使用できないようにしたほうが良い。
- <その他>
- ・スノーボードもあると良い。8
 - ・ノルディックも選択できるようにしてほしい。
 - ・3泊4日にして欲しい。4

- ・1泊2日が良かった。6
- ・自由参加にして欲しい。
- ・1日フリーの日を作ったらどうでしょうか。
- ・スケート実習をスキーにして欲しい。
- ◎リフト券の配付を下級班でも3日券にして欲しい。
- ・スキーが上手くなるためだけに3日間かけたというならあまり意義があるとは言えない。
- ・もっと学年全体で行動が素早くなればよい。

③平成10年度

<講習関係>

- ・ボールができて良かった。2
- ・楽しかった。わかりやすく良かった。17
- ・先生が良かった。丁寧に教えてくれた。フレンドリー。学生の意見を採り入れてくれた。30
- ・新雪に突っ込んだときは大変だったが雪は良かった。第6に行きたかった。5
- ・質問等の時間がほしい。話し合いをしたい。
- ・アドバイスやもう少し指導してほしい。3
- ・意味ないことばかりやっていた。2
- ・2日目はもう少し長くても良い。
- ・班の変更や実力に応じた班選択が必要だ。7
- ・人数が多かった。3
- ・好きな者同士の班編成が効率的。
- ・女子がいなかった。クラス毎だと友達が増えない。
- ・体調不良のため休憩がほしかった。

<宿泊関係>

- ・入浴時間が短い。
- ・学習時間はとらない方がよい。
- ・別館に女子を入れてはいけなかったのか。
- ・部屋が埃っぽかった。
- ・部屋がせまい。
- ・308(女子)屋根裏風の部屋は差が大きかった。3
- ・meetingの会議室が寒かった。
- ・消灯が早い。夜学生を信じてほしい。夜うるさい。
- ・夕食が冷たかった。あまりおいしくなかった。6
- ・夕食が早い。2
- ・3日目の朝食を食べ損ねた。

<その他・全般>

- ・おもしろかった、楽しかった、上達した。19
- ・来年、他学年でも実施してほしい。10
- ・期間を長くしてほしい。4
- ・日程が厳しかった。
- ・3日間は長い。1泊2日ナイター付きにして欲しい。2

- ・友人との親睦が深まった。
- ・他のスキー場も行きたい。
- ・もうやりたくない。
- ・スキー実習より集団生活ということの方が大切だ。
- ・旅館とスキー場の距離が遠い。2
- ・点呼後すぐ帰らせてほしい。2
- ・昼食を自由にしてほしい。
- ・フリーを長くして欲しい。自由に滑りたい。53
- ・スノボにしてほしい。3

これらの学生の声や要望に関しては、効率的な実習をめざし可能な限り次年度に改善するよう努力した。また、実習全体の印象が天候により左右される面も見受けられた。

5. まとめ

今回、学年全体が同一日程で実施されるようになった平成5年度から平成10年度までのスキー実習について報告することができた。同一期間に開催されることによって学年行事としての位置付けが高まってきた。学生の実習に取り組む姿勢は意欲的であり、ほとんどの者が技能の向上を実感できていた。この5回の実習では各学年の全面的なバックアップのもと、学生からの支持も高く行事として所期の目的は達成していると思われる。今後とも年度毎に学生の意見を参考に見直しを図り、基礎スキー技能検定の導入や単位認定の方向も含めより良い行事にすべく努力していきたい。

週休2日制の導入や教育課程の改定により、全国の小中高等学校では各種行事の消滅や縮小が行われている。本校ではこの行事が形態こそ変化してきたものの継続して実施されていることは、学校発足当時の高い教育理念と関係者の努力の賜物であり、この実習の意義と教育的効果が全教官に認識されたことと思われる。行事を推進する側としてこれらのことに常に敬意を表し継続・発展させる責任を強く感じている。

参 考 文 献

- 1) 長野高専三十年史編集委員会：長野高専三十年史。pp372-396, 1993